

# 月報

29号

発行所

青丘文庫

発行★韓 哲 曦 編集★金 慶 浩  
〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1  
メゾンド青丘ビル2階  
TEL (078) 734-5989

## 『秀刊 三千里』終刊に思う

姜 在 彦

『秀刊 三千里』は、去る五月に発売した五〇号で終刊となった。そして五月二十二日には東京で、同月三〇日には大阪で、同誌の続刊を支えてきてくれた多くの執筆者や読者によって、その終刊を惜しむパーティが開かれた。一九七五年二月の創刊以来、編集委員の一人としてかかわってきた者として、感無量である。

創刊当時でさえも、われわれをとりまく同胞社会内部の雰囲気は、きわめて陰鬱そのものであった。創刊当時の編集委員は七名で、彼らは拙いも拙って、一九六〇年代後半から七〇年前半までは、朝鮮総連で長い間活動してきた連中であつた。組織を離れてのちも、かれらの自主的な言論や行動は、常に組織的かつ集団的圧力の脅威にさらされていた。金達寿の作品集

『対馬まで』（河出書房新社）に収録されている「備忘録」は、かれ個人のそういう生々しい体験を書いたものである。

創刊当時、誰もが三号雑誌でおわるだろうと予測していたし、また本誌の存在を快く思わない者達も、そのように期待していた。

ところが本誌が順調に発行しつづけ、反響も

大きくなるにつれて、一方では「KCI-Aから資金をもらっている」とデマをとばし、他方では正体を偽造した「朝鮮総連の別働隊ではないか」というデマもあった。

本誌が出発した当初から、ほかの編集委員たちもそうであつたと思うが、秘かに期するところがあった。それはかつての経験にたづねて外部からの政治的圧力に屈して、またはそのインパクトによる編集委員内部のあつれきによって、雑誌を中途半端でおわらせるような醜態を天下をさらしてはならない、ということであつた。その最大の危機は一九八一年三月に、編集委員のうちの金達寿、李進熙に私に加わつて、在日同胞の五名の死刑囚の救命とその他の減刑を請願するために訪韓して帰ってからのときであつた。その時の朝鮮人、日本人を含めた排韓文集は膨大なもので、その切抜き帖は、今も大事に保存している。

或る論客は「三千里」から「千五百里」に墮落したといひ、或る人たちは執筆者も読者もはなれてしまつて、もうすぐつぶれるだろうと予言してまわつた。ともあれ最後まで残つた四人の編集委員の自主的判断と責任において、五〇号を区切り終刊することができた。しかし韓国・朝鮮問題を共通の広場として、日本人も朝鮮人も自由に論じあつてきた本誌の終刊を惜しむ声は、今も絶えない。

朝鮮民族運動史研究会（第六八回）例会報告

一九八七年六月二一日

例会の曜日変更及び論文集発行についての話し合い

最近研究会への参加が低調になってきたことに対する対策、また、会のメンバーである飯沼次郎先生が来年古希を迎えられるに当たり、記念の論文集を出すということで、通常の研究報告は行わず話し合いが持たれた。曜日の変更を含む重要な話し合いのため、事前に往復葉書で出欠を確認、一四名が参加した。

司会は水野氏が担当、まず今年に入ってから出席状況が七八人平均と全会員の半分以上であることが報告され、出席率を上げるために研究会の曜日の変更が提起された。

この時点で行われていたのは、第三土曜日の午後三時から。土曜日になった理由は、同じ青丘文庫で行われている在日朝鮮人運動史研究会が第二日曜であるため、両方出席している人が月に二回も日曜日が潰れるのは困るだろうとの配慮からだ。しかし、最近の出席率から鑑み、できるだけ多くの会員が参加できる曜日にしなければならないのではないかということであった。

ウィークデイはどうかなど、いろいろな意見が出されたが、結局日曜日以外にはないということになり、第三日曜日に変更することが決定された。時間は従来通り午後三時から。

また、この近辺の研究者に出きる限り働きかけ、会員を増やし研究会の充実を図っていくことも確認された。

続いて、出席率ひいては会の活動の沈滞と関連して、『民族運動史研究』の原稿の遅れが姜在彦先生から指摘された。そして、こんごさらに充実した雑誌を出していくにはどうしたいのかという問題について話し合われ、活発な意見が出された。そのひとつとして、原田氏から内容の多様化を図ってはどうかとの意見が出された。たとえば、きちつとした論文ばかりではなく、もっと、小品的なものもあれば、いろいろな角度から読みごたえのあるものになるのではないかといいわけだ。

これには賛成の声が多く、具体的な内容として、研究動向紹介、資料紹介、書評、研究予報的なもの、紀行文、研究ノートとエッセイの中間的なものなど、いろいろな意見が出された。最終的に、次回の雑誌からは本格的な論文は三本くらいに減らし、研究ノートや余録、書評など軽いものを載せていく方向が確認された。

また、次回である来年は飯沼先生の古希に当たるため、その記念論文集にすることが提案され、確認された。発行は来年月、全部で六百枚程度で原則として会員全員が論文を書くこと、そして、各自の具体的なテーマは次の例会までに決めてくることになった。

在日朝鮮人研究会（第九二回）例会報告

一九八七年七月二二日

# 「日高川ダム建設現場に

## おける朝鮮人労働者」

金 静 美

「和歌山・在日朝鮮人の歴史」（『在日朝鮮人史研究』一四号、一九八四年）で若干触れた、一九一九年二月二七日の日高川ダム建設現場における朝鮮人労働者と日本人労働者の闘争について、聞きとりと新聞記事をもとに報告した。

一九八七年六月二八日、日高川中流域の龍神村福井発電所のすぐ近くの農家の庭先で、手作業の手を休めて、一九一〇年生まれの小川順吉さんは、少年の頃、「あの入ら」からならった朝鮮語（「チョンゴンはええということ、ナッブンはきらいということ・・・」）や、「あの入ら」の名「キンナンジュ、リケイフク、コーシユンヨー」を、約七〇年前の記憶の底から引きだして、語った。「あの入らは米つきを手つどうてくれた。

発電所のなかのモーターを、抱きあげて見せてくれた。あの入らが帰るとき泣き別れだった・・・」と、小川順吉さんは昔を思いだした。

「あの入ら」とは、日本支配下の朝鮮から日本に来て、一九一八～一九九一年に、日高川の当時、上山路村柳瀬、福井間の発電所の水路開さくに従事していた朝鮮人労働者のことである。その一人林南烈（当時二六才）は、一

九一七年に北海道に渡り、一八八一年にこの工事現場に来た。

一九一九年、三・一独立運動の前夜、二月二七日、福井の工事現場の朝日労働者が闘争し、双力が逮捕され、朝鮮人一八人、日本人六人が「騒擾罪」「爆発物取締罰則違反」「現住物放火罪」「傷害罪」で裁判にかけられ、

二年から六月の実刑をいわれたされた。（朝鮮人の最高刑二年、日本人は一〇年）

そのなかには、小川さんがいまなお記憶している李敬福、高俊弘もいた。

和歌山の山中で働く朝鮮人労働者は、その工事現場近くの山村の少年少女と親しく交流していた。その一

方、共に働く日本人下層労働者とは鋭く対立していた。

このとき闘争した川崎組の日本人労働者は御坊の被差別部落民であったという新聞報道があるが（『牟婁新報』一九一九年三月一日）、福井発電所工事現場での朝日労働者の闘争は、下層の日本人労働者のなかにおいても、被植民地民衆に対する共感よりも、敵対感が強くあったことを示しているのではないか。

工事が終わったあと、川沿いの細い道を列を組んで歩いて御坊に向かったという朝鮮人労働者が、その後どこに行ったのかはわからない。

朝鮮を離れて和歌山の工事現場で働く朝鮮人労働者とは逆に、和歌山を出て、朝鮮や中国東北部に行った日本人も少なくなかった。これらの日本人は、しかし、下層労働者としてではなく、植民者であり、朝中民衆の敵対者であった（和歌山県人鮮清発達史編纂部「和歌山県人鮮清発達史」一九二七年、参考）。

| 書 名            | 編 著 者 名    | 出 版 社       | 年 月   | 冊 数 | 頁            |
|----------------|------------|-------------|-------|-----|--------------|
| 教科書に描かれた朝鮮と日本  | 李 淑 子      | 東京はるふ出版     | 85・1  | A5  | 730          |
| わが抗日独立運動史      | 李康勲著 倉橋葉子訳 | 東京三・一書房     | 87・5  | A5  | 253          |
| 日韓企業経営の諸問題     | 桃山学院大総合研究所 | 編集発行 大阪 同所  | 86・12 | A5  | 259          |
| 李陸史全集          | 심 원 섭      | 서울 집문당      | 86・6  | A5  | 422          |
| 韓国 Ⅱ 朝鮮食品      | 李 瑞 来      | 서울 梨花女子大出版部 | 86・5  | A5  | 359          |
| J若 錦 Ⅱ 行政思想    | 張 東 熙      | 서울 一 志 社    | 86・7  | A5  | 215          |
| 猪飼野物語          | 元 秀 一      | 東京 草風館      | 87・7  | A5  | 245          |
| 現代朝・日関係史       | 高 峻 石      | " 社会評論社     | 87・6  | A5  | 316          |
| 近代の集落神社と国家統制   | 森岡 清美      | " 吉川弘文館     | 87・5  | A5  | 307          |
| 「天皇制」論集 1. 2.  | 久野 収也      | " 三・一書房     | 75・2  | B5  | 2454<br>2475 |
| 天皇親の精刻—1945年前後 | 武田 清子      | " 岩波書店      | 82・4  | A5  | 356          |
| 韓国社会 Ⅱ 階級研究    | 이 진 규 他    | 서울 圖書出版회    | 86・2  | A5  | 260          |
| 韓国史時代区分論       | 韓国経済史学会    | 서울 乙 酉 文化社  | 86・12 | A5  | 365          |
| 武田範之伝 (與前前提史)  | 川上善兵衛 他    | 東京日本経済評論社   | 87・5  | A5  | 873          |

## ☆研究会案内

## (1) 在日朝鮮人史研究 (第93回) 例会

日 時: 1987年9月13日 (日) 午後2時

テーマ: 大阪府の在日朝鮮人対策

報告者: 金森 稔作氏 (朝鮮協和会代表)

## (2) 朝鮮民族運動史研究 (第70回) 例会

日 時: 1987年9月20日 (日) 午後3時

テーマ: 閩化派の革命と政治危機

報告者: 金 河元氏

場所はいずれも青丘文庫にて

## 金 英達氏 資料提供

1. 「在日朝鮮人の帰国問題について」
2. 「朝鮮プロテスタントと平壤メリヤス工場」
3. 茨城キリスト教大学『要』第20号等抜刷ありがとうございました。

\*夏休みのお知らせ

自 8月14日～至 8月17日まで

\*次号 (30号) のコメントは

金森 稔作氏